

「会員短信 39」

「釣りのこと俳句のこと」 柳村光寛

ひよんなことから釣りを始めて二十年以上になる。子どもが小学生の時には、サヨリ、豆アジ、コノシロ、キスなどを日曜の度に一緒に釣っていた。そのうち次男が船で沖釣りをしたいと言いだして、乗り合い船の常連となった。釣り物も増えて真冬のヤリイカ、佐渡島沖のウスメバル、夏のスルメイカ、寺泊沖の大アジ、大サバ、真鯛などを釣った。中でも、真鯛の強烈な引きは一度味わえば病みつきになる。今までの記録は八キロで、まるで特選をとった気分であった。

俳句を作るようになったのは十三年前からで、地元紙の新潟日報や全国紙に投句するようになった。そんな時、俳誌「俳壇」で微苦笑俳壇（当時）に出会い、俳句の本質が「滑稽」にあることを知り、滑稽味のある句を作るようになった。

地元紙では一昨年から酒場詩人の吉田類氏が、月一回、紙上句会の選者になり、天、地、人の入選回数で年間大賞が決定されることになったが、一席に選ばれて新潟日报社で吉田氏より表彰を受けた。「俳句を通じて思いっきり人生を楽しんでいる」との評をいただいた。これも滑稽俳句を通じての御指導の賜物とこの場をお借りして御礼申し上げる。

大樹から蛇落ちてくる落ちてくる

分骨は軽き手荷物天の川

夏きざす太き駝鳥の尻と脚

釣りも俳句も自分のイメージ通り釣れ、ものにできた時の喜びは何ものにも代えがたいものがある。